

音 楽 科

大 滝 菜保美
徳 田 典 子
笹 谷 真理子

1 音楽科における見つめ直しのある聞き合い

音楽的スキーマ
音楽を表現・鑑賞
するために必要と
なる経験と能力

子どもは、音や音楽に出会うことで、音楽的スキーマや生活経験から何らかの感想を抱く。表現活動においては、各自の感想を受けとめ合うことでこんなふうに表現したいとの思いが生まれる。その思いを音楽としてよりよい表現にするために考え、試み、新しい音楽表現に迫る。

音楽性

音楽を理解し、そ
のおもしろさや美
しさを感じ取った
り表現したりする
こと

鑑賞活動においては、音楽を聴いた感想をもとに互いの感じ方やイメージを受けとめ合い、音楽を特徴付けている要素と結びつけたり、多様な感じ方を理解したりすることで考えを深めていくことができる。このような「受けとめ合い」の活動を繰り返すことで、よりよい音楽表現に近付き、個々の感性や技術が高まり、音楽科のねらいである「音楽性を培う」ことになる。

また、子どもが音や音楽そのものの美しさや楽しさを分かち合ったり、共に思いや意図をもって表現したりする楽しさや喜びも大切にしたい。

以上のことから、音楽科においての見つめ直しのある聞き合いを次のようにとらえる。

様々な音や音楽を通して 自分なりの感じ方で向き合いながら
互いにかかわり 自らの音楽性を高めていく姿

2 見つめ直しへと向かう状態

(1) イメージをとらえ直したい状態

音や音楽、楽器との出会いを経て子どもは、個々に様々な表現に対するイメージをもつ。「他の人はどんなイメージをもったのだろう」と他のイメージを聞いてみたいという思いをもつ。そのイメージを受けとめ合って共有していく。子どものイメージも様々で個人差があり、それを互いに表出することで、いろいろな感性に出会うことができる。「楽しい感じ」「弾むような感じ」などのイメージを交流することで共感したり、違いを感じたりして、イメージをとらえ直したいという思いをもち、よりよい表現に生かそうとする。

(2) よりよい表現にしたいと思う状態

最終的な表現活動を明確化することで、よりよい表現にしたいと思う。そして、何をどのように向上させれば、最終的な表現活動に近付くことができるのかを自覚する。この「何をどのように向上させればよいのか」を考える段階で、互いの考えや表現を受けとめ合い、よりよい表現をしようと試行錯誤することで音楽的な深まりを促すことができる。

(3) 良さや改善点を生かそうとする状態

過程の繰り返し

表現されたものを聴いて、聴き手が表現側に良さや改善点を伝え、さらにそれらを生かそうとする。そうして高まってきた感性や技能を用い、音楽的な要素をもって自在に表出（音楽表現および聴き取り）する。この過程を繰り返すことで表現がよりよいものへと変化し、これらの活動を通して習得した表現方法は、次の楽曲に出会ったときにも生かされる。また、子どもは、具体的な例（音や音楽を媒体としたもの）に触れながら音楽性を高めていくことができる。

3 受けとめ合いを通して見つめ直すための手立て

(1) 音楽を形づくっている要素に着目させる

音楽を形づくっている要素

「音楽を特徴付けている要素」と「音楽の仕組み」などを含むあらゆる要素

子どもは、楽曲に初めて出会ったとき、個々に様々な感じ方をする。それらは、漠然とした印象、生活経験や既習にもとづく反応、音楽を形づくっている要素が絡み合った感受などである。それらを子どもなりに言語化して、お互いに受けとめ合う。しかし、お互いに考えや思いを受けとめ合うには、個々の感じ方を共有させる必要がある。

例えば、ある楽曲を聴いて「ねこが踊っているみたい」と述べた子どもの発言は、拍子やリズムをとらえたからなのか、踊りと思うような歌詞を見つけたからなのか、楽器の音色からなのかと、要素を促すことで他と共有できる。

思いを具体化する

また、音楽を形づくっている要素に着目させることで、次の表現に向かう手がかりをつかむことができる。リコーダーで「きれいに流れるような感じで演奏したい」と思いや意図をもって演奏しようとする子どもには、聞き合いの活動において、レガート奏やフレージング、タンギングの強弱などに気付かせることにより、イメージを具体的な演奏方法として伝え、思いや意図を共有することができる。

(2) 学習の過程を自覚させる

課題

子どもが学習してきたことを理解し、今自分にとって何が必要なのかを分かり、それを会得することによって自分で決めた表現活動に近付くことができる。

そのために、教師が課題を提示してそれに従って学習を進める方法より、子どもが自ら課題を見つけて取り組む聞き合いの活動によって課題を解決していく方法が、子どもの主体性を育むうえで大切であると考え。そこで、子どもに、今自分がどこまでできていて、これからどんなことをどのように解決していくのかという学習過程を自覚させる。

(3) 音や音楽を聴き比べる

音や音楽を媒体とする聞き合い

比較する

音楽科の学習において、言葉だけによる聞き合いは成立しない。常に音や音楽を媒体とした聞き合いが前提である。その時には、表現を聴き比べて楽器や声の特徴、その共通点や相違点などを見つけ出すことで、次の表現に向けて留意すべきことが明確になる。表現だけでなく鑑賞の領域でも、「聴き比べる」ことでそれぞれのよさや特徴が明確になる。よさや特徴を明確にすることで、次の活動へとつながり、受けとめ合いの活動を活性化させることができる。

(4) テキストを活用する

音楽科のテキスト

音楽科のテキストとは、楽譜、絵譜などのオリジナル譜、範唱範奏 CD、演奏を録画・録音したもの、子どもの演奏そのものなどを指す。これらのテキストを必要に応じて活用し、聞き合いの活動に生かしていく。

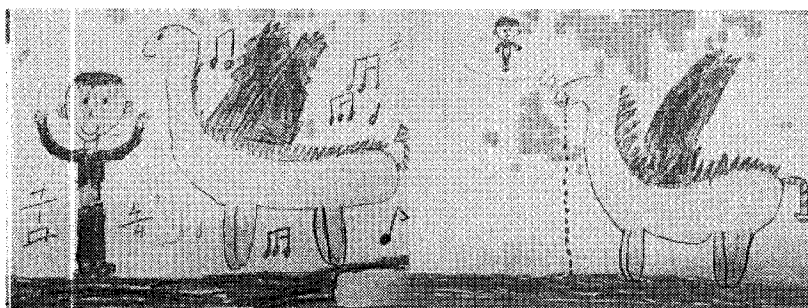
例えば、範奏を聴き、楽譜を見て音を確かめる。また、演奏するために自分たちが必要なことがらを書き込んでいく、友だちからのアドバイスを書き込む、オリジナルの絵譜などで自分たちだけに分かるように書き加える、などがテキストの活用と言える。

この方法は、一瞬にして消えていく音楽の表現を可視化し、共有し、再生し、向上させるために大切な手だてであり、受けとめ合いや見つめ直しの活動を活発に機能させる手だてである。また、機器に頼るだけではなく実際に自分の耳で聴き、とらえることを大切にしたい。

4 実践例

(1) 音楽を形づくっている要素に着目させる

① 3年生の実践（歌でお話を語ろう「パフ」）



資料1 物語のイメージ画

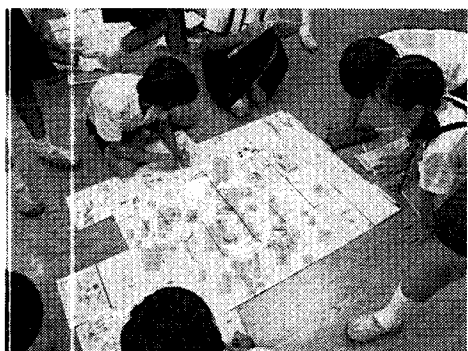


写真1 パフの心情を確認し合う姿

物語性のある曲に取り組んだ「歌でお話を語ろう」という題材では、子どもたちに歌詞の表す様子を想像させ、主人公パフになったつもりで歌い方を工夫させた。はじめに、この楽曲の歌詞を見せて物語を想像させ、思いをイメージ画という形で具体化することから

ら始めた。今回使用した歌詞は野上彰による訳詞で、絵本の「魔法のドラゴンパフ」に則している。1、2番では、少年ジャッキーペーパーとその友達パフが、ゆかいな冒険を楽しんでいる。3、4番では、ジャッキーが現れなくなり、パフが失意の中、自分の棲みかに帰っていく悲しい気分が表されている。イメージ画は、特に主人公パフの思いをくみとり、パフの表情をはっきりさせ描くことを促した（資料1）。

楽曲を繰り返し歌唱し、パフの心情にふれるたびに、子どもは3番後半から4番は悲しい気分の歌にするためにどうしたらよいかということを考え始めた。楽譜上では、1～4番

まで曲想表現は同じである。そこで、悲しい気分がより強調されている範唱CDを鑑賞することから、速度という音楽を形づくっている要素に着目させ、その速度にともなう曲想表現の変化の効果について気付くことができた。また、自分たちの演奏録音との聴き比べにより、速度によって変わる曲想表現について見つめ直しをさせることができた。

子どもからは今までの学習経験をもとに、「悲しい表情で歌うと、もしかしたら聴いている人に悲しい気分が伝わるかもしれない」などの予想が出た。自分たちの歌の演奏録音を聴き直した後の話し合いで「1・2番は明るい気分、3・4番は悲しい気分とみんなで決めて歌ったけど、3・4番まで明るく聴こえたからだめだ」「悲しい表情で歌うだけでは歌は悲しく聴こえないよ」などの意見が出て、どんな曲想表現をしたらパフの悲しい気分が出せるかを話し合った（写真1）。その上で範唱CDの演奏の鑑賞をさせたことは、自分たちの演奏をさらに見つめ直しすることにつながり、速度などの曲想表現を生かして工夫することが、いかにパフの心情を歌で表すために必要に気付く手だてとなった。

② 1年生の実践（はくをかんじとろう）

「はくをかんじとろう」では、音楽のさまざまなリズムを感じ取ったり、表現するための根幹となる「拍」を手や体の動きを工夫しながら体感させた。「さんぽ」や「ミッキーマウスマーチ」などの軽快な楽しい曲に合わせて、足踏みしたり身振りをつけて行進したりした。

体の動きが拍の流れに合っているかどうか意識させるために、グループ毎に手や体の動きを工夫させた。「ここは元気な感じだから大きく手をふろう」「曲がちょっとさみしい感じになるから足踏みを小さくしよう」など、曲の気分に合わせて動きも話し合いの中で聞かれた。グループごとに動きを見合い、曲に合った楽しい動きを共有しながら、拍の流れを感じ取ることができた。また、「拍リレー」や「ことばあそび」などのさまざまな音楽遊びを通して、友達の拍を感じる動きを見ながら、自分の動きが拍の流れに合っているかをみつめ直すことができた。

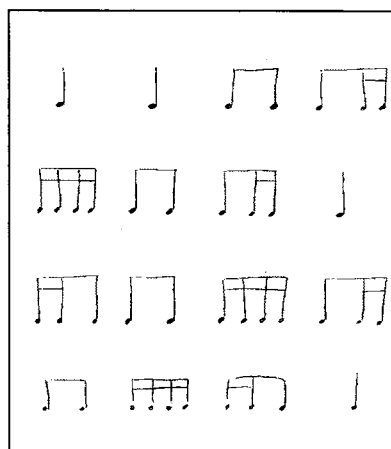
(2) 学習の過程を自覚させる

① 4年生の実践（リズムを感じよう…ドラムスの演奏をめざして）

ドラムスを使用して一人一人が演奏することを目標に、三つの学習を取り入れてきた。一つ目はリズムの聴き取り、二つ目はメトロノームに合わせてスティックコントロールをする、三つ目はドラムスを使って演奏することである。

一つ目のリズムの聴き取りでは、一小節を四拍入るようにして紙を四段に折り曲げて、マンションの部屋にたとえた（資料2）。高低差のあるドラムスの特徴を利用し、一部屋に一拍ずつ入れるにはドラムスの音の高低の変化をとらえるために、ゆっくりとしたテンポで演奏した。また、一拍のかたまりを意識させるために、一拍の音符カードを示し、確実に全員が書き取れるように3回繰り返し演奏をした。二つ目は、音符カードに示した一拍のかたまりを実際にスティックで演奏表現した。メトロノームをつけてストロークすることで、一拍のかたまりがより意識でき、速度に対して柔軟に対応できるようになった。同時に、三つ目のドラムスの演奏の動作をボディパーカッションで体感させた。8ビートのパターンが理解できると、ドラムスの楽器の扱い方の理解が必要となった。自在に楽器が使えるようになると、8ビートのリズムの演奏がドラムスを使用してできるようになった。また、リズムの聴き取りで一拍のとらえがはっきりとした段階からは、スティックコントロールを取り入れ、一拍の分割をはっきりと表現させた。さらに、演奏の中に自分の考えを生かせる課題を作り、創意工夫することで自分の考えをもって演奏をする活動に入ることができた。友達の創意工夫したことを聞き、さらに自分の工夫へつなげていく姿が見られた。

ドラムスの演奏では8ビートのパターンを3回演奏し、一小節のフィールインを自分で四拍を組み合わせ、ノリのいい演奏にするという課題を与えた。子どもは創意工夫をしてドラムス演奏を楽しむことができた。一人一人が友達の演奏の様子を見たり、演奏を聴いたりすることで、自分のつまずきは学習の過程のどこが不足しているかを見つめ直し、自分の学習の積み重ねの大切さに気付いて、技術的な不足を補っていた（写真2）。また8ビートのパターンを習得するには、きちんとカウントを言語化し、右足のベースドラムのリズムを演奏し、右足と左手、右手と左手、右手と右足と組み合わせ、右手と左手と右足が同時に出来る8ビートの完成と進んでいく。「音がぼやけているよ ベースドラムをもっとつま先で踏むといいよ」（写真3）「スティックの握り方に気をつけないとフィールインの時にテンポに乗り遅れるよ」など、どの点が不足で前に進まないのかを、友達同士でアドバイスしながら理解していた。このリズムの題材は自分自身の学習の進度や過程が自覚しやすく、努力目標もとらえやすい課題であった。



資料2 リズム聴音による
書き取り



写真2 演奏を聴き合う姿



写真3 ベースドラムを
演奏する姿

(3) 音や音楽を聴き比べる

① 1年生の実践（はくにのってリズムをうとう）

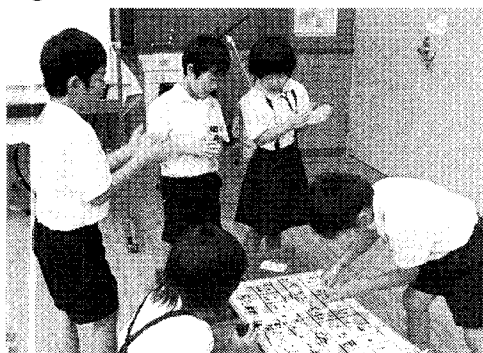


写真4 グループで試行錯誤する姿

「はくにのってリズムをうとう～リズムでれすとらんめにゆうをつくろう～」では、♪や♫をつかって、いろいろなレストランメニューのリズム作りをした。この題材では「♪」「♫」「♪」を自由に組み合わせてリズムを作り、演奏しながら、楽しく音符や休符のリズム打ちに慣れていくことをねらいとした。

「すし」「やきそば」「やきおにぎり」「しらたまおしるこ」など様々な字数の10種類以上のメニューを提示し、グループで相談して選んだメニューをリズムで表していた。

最初に共通のメニュー「ポテトサラダ」のリズムをグループで考えた。最初にどのグループも考えたのは「♪♪♪」であった。既習のことばあそびでの「♪♪♪いちご」や「♪♪♪オムライス」などの自然な言葉のリズムに慣れていたのである。しかし、あるグループのつくった「♪♪♪ポテトサラダ」のリズムを聴いた後の感想交流の中で、「おもしろい」「歌みたい」「コマーシャルにできそう」という気付きが広がり、♪や♫の組み合わせを工夫してできるリズムのおもしろさを感じた。「もっと違うリズムもできそうだ」と自分たちの表現を見つめ直すきっかけとなった。グループで相談し、「♪♪♪」「♪♪♪♪」など色々な「ポテトサラダ」のリズムをつくった。つくったリズムを実際にみんなで打ち、聴き比べることで、♪と♫を入れ替えた感じの違い、リズムのもつおもしろさ、楽しさに気付き実感することができた。

この活動を生かして、それぞれのグループで好きなメニューのリズムを考えた。「やきおにぎりは♪♪♪」「もうちょっと工夫できないかな?」「最後の♫を♪にして♪♪♪にしてみよう」などと試行錯誤しながら意欲的にリズムを考える姿が見られた（写真4）。

「ヒレカツ」は「♪♪♪」「♪♪♪♪」「♪♪♪♪♪」「♪♪♪♪♪」、 「ピザ」は「♪♪♪♪♪」「♪♪♪♪♪」「♪♪♪♪♪」「♪♪♪♪♪」などグループによって多様なリズムができた。「休符を入れたらおもしろい」「最後に♫を入れるとノリのいいリズムになったよ」など、同じメニューでも音符の組み合わせや休符を入れると感じが変わることを実感していた。

最初に共通の課題で聴き比べ表現の違いに気付いたことは、それまでの自分の表現を見つめ直し、さらに違った表現をめざす有効な手だてとなった。

② 5年生の実践（鑑賞アジア旅行をしよう）

アジアを旅行しよう		
①どんな感じ?	②演奏している人数	③国
和風な感じ	8人	日本
中華っぽい 曲調が面白い	2人 (二重奏)	中国
お祭りっぽい ジャングル おもしろい	3人	インド
鳥が鳴いて さうは感じ	大だいこ ニニバル	インドネシア
不思議な 感じ	多人数 和楽器	トルコ

資料3 音楽を聴き比べるためのワークシート

今までに様々な楽器、音楽、日本音階などを学習してきた。その既習や音楽的スキーマを生かし、「クラスで全問正解を目指そう」という音楽を聴いての国あてクイズを行った。事前学習やヒントもなく、音楽だけを聴いてお互いの感想や意見を聞き合い、どこの国の音楽かを推測していくのである。わかっていることは、五つの国名だけである。国や曲は子どもの分かりやすいものや興味をもつであろうと思われる曲を入れるなど考慮した。

1曲目は日本「春の海」、2曲目は中国「二泉映月」、3曲目はインド「ラーガ」、4曲目はトルコ「ジェッディン デデン」、5曲目はインドネシア「パンプゴ」である。ワークシート（資料3）は、①どんな感じ?②演奏している人数、楽器 ③国を

記入させるものである。①か②で感じ取ったことをもとに③の国を推測できるようにした。②は楽器の音色を聴き分けるために、「演奏している人数」「楽器（管楽器・打楽器・弦楽器などの種類または楽器の名前）」を聴き取るように促した。最初に何回か1曲目～5曲目までの最初の部分を聴き、後は音楽室に5か所CDデッキを配置し、それぞれの場所へ行くと自分が聴きたいと思う国の音楽が流れるようにした。

すると、それぞれのCDデッキの前で考えを受けとめ合い、イメージをとらえ直そうと再度聴き直す姿がみられた(写真5)。



写真5 再度聴き直している様子

例えば、1曲目の曲の前では、「箏がはいっているから絶対日本だよ」「えっ、中国にも箏はあるよ」「…」「僕の家のお店で流れてる!」「何屋さん?」「日本料理」「和風な感じがする」「お正月によくCMで流れてるよ」「そうだね、よく聴くよ」という感想を受けとめ合っていた。2曲目の前では、「中華料理屋で流れてるみたい」「何か寂しそうで寂しくない感じ」「楽しそうで楽しくない不思議な感じ」「人数は一人だよ」「二胡だよ」「2曲目を聴くと1曲目の方が日本風に聞こえるよ」など自分の最初のイメージを見つめ直そうとする姿が見られた。

それぞれのCDデッキ設置場所で納得いくまで音楽を聴き、意見や感想を受けとめ合った。その後、全員でプリントに書いたことを中心に考えや意見を出して、国を推測した。1曲目や2曲目は楽器を知っている子どもがいたので簡単に子どものスキーマで答えを導き出すことができた。しかし、3曲目以降は根拠となるものがないため、いろいろな意見が出されたが、ヒントとして演奏している写真を提示すると、自分たちが聴き取ったことを、演奏している写真と比較することでどこの国の音楽かを推測することができた。

この鑑賞の授業では、5か国の音楽（楽器、演奏形態）を聴き比べることで、それぞれの特徴をつかみ正解を導き出すことができた。よって、それぞれの音楽を聴き比べることは、見つめ直しに有効な手だてとなった。

③ 6年生の実践（歌唱「歌声チェック」）

アドバイスを留意したり、良さを意識したりして普段から歌っていくことがさらによりよい表現につながるであろうと考えた。歌のテストを学期ごとに一人一人行い、テストの時には、教師が個人のアドバイスも含め、良かったところなどを伝えるようにしてきた。しかし、テストの緊張と終わったうれしさでアドバイスはあまり子どもには残らなかった。そこで、アドバイスをもらうことを、練習に組み込み、「歌声チェック」をすることにした(写真6)。



写真6 歌声チェックの様子

「歌声チェック」とは、三人グループをつくり伴奏に合わせて一人ずつ歌い、他の二人からアドバイスや感想をもらうことである。聴く（見る）観点としては、「歌詞をはっきりといえたか」「顔の表情はよかったか（口が開いているかまた視線が下がっていないか）」「頭声のひびきが出せたか」「強弱をつけることができたか」の四点である。テスト終了後は自己評価もつけた。グループは、いろいろな子どもの声と比較できるように、できるだけメンバーを変えて聞き合いが多くできるように配慮した。すると、自己評価とアドバイスや感想が違う子どもがでてきた。

Aさんは、最初に歌いました。私は、「口はまあまあ開いていて、声のひびきもまあまあかなあ。」と思ったけれど、Bさんの歌をきいたら、Aさんは「やっぱり口が開いていない。それに、声ももう少し出すようにしたらいい。」と思いました。

資料4 聴き比べによる子どもの感想

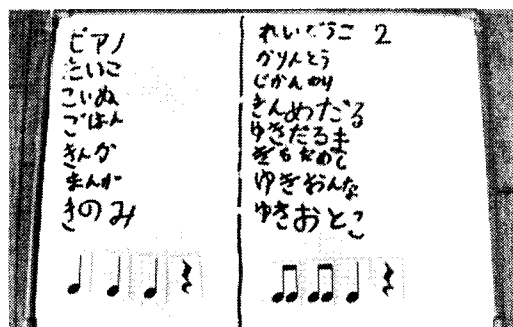
を比較しながら聴き、判断できるようになった子どももいた（資料4）。

このように「歌声チェック」は自分の声を、他の子どもと聞き比べて、客観的にアドバイスや感想をもらうことで、自分の良さや改善点が分かり見つめ直しに有効に働いたと考えられる。ただ、チェック項目の「頭声のひびきが出ているか」では、「ひびき」の理解がそれぞれに違い、「声の大きさ」で判断している場合もあった。その違いを聴き取ることができるよう、これからもいろいろな子どもの歌声や範唱を聴き比べる機会を多くもつことが必要である。

(4) テキストを活用する

1年生の実践（はくにとってリズムをうとう）

一瞬にして消えていく音楽の表現を共有するためには、音楽表現を可視化することが必要である。



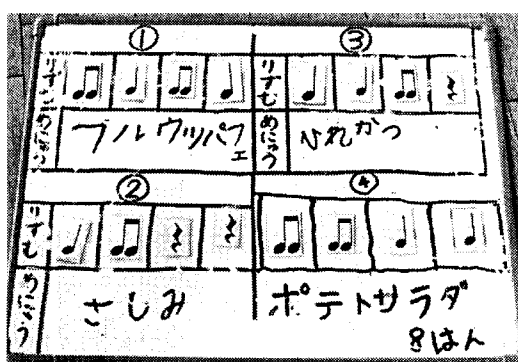
資料5 リズムに合った言葉さがし

である。

「はくにとってリズムをうとう」ではリズムに合った言葉さがし（資料5）やレストランメニューのリズム作りで、ホワイトボードや音符カードが、受けとめ合い、見つめ直しの有効な手だてとなった。

レストランメニューのリズム作りでは、ホワイトボードに四拍分の枠と下にメニューを書く欄を作った。四拍分の枠には「♪」「♪」「♪」の音符カードを貼っていく。1年生にとって、実際に音符を書くことは難しいが、音符カードは簡単に並べ替えができ、グループで話し合いながらリズム作りができる。（資料6）

子どもたちは「ここに休みを入れたどうなるかな」「♪と♪を入れ替えてみよう」など手をたたき、リズムを確認しながら作っていた。また、発表の際もそのまま提示でき、自分たちのグループとどこが似ているのか、違っているのか、表現のおもしろさがどこにあるのかを視覚的にもとらえることができ、自分たちの表現に生かすことができた。



資料6 リズム作りのホワイトボード

5 成果と課題

(1) 音楽を形づくっている要素に着目させる

成果は、学年の発達段階に応じた、適切な教材を選択し、音楽を聴いたイメージや音楽に合わせた動きを共有することで音楽を形づくっている要素に気付くことができた点である。学年の心情や発達段階にあつていて、主人公の思いに寄り添ったり、音楽に合わせて体を動かすことで、曲想表現の工夫への必要感に気付いたりすることができた。また、イメージ画を描くことは、自分の思いを可視化することから始まり、友達イメージ画から得られる思いに互いが

共感し、個々の内面に抱く感情の違いまでにふれる機会にもなった。そのことから、より曲想表現の工夫に気付かせる手だてにつながったと考える。

しかし、曲想表現やイメージしたことを言語化することは、子どもにとってとても難しいことであり、音楽的な学習経験が必要となる。今後は、他の楽曲などの学習の場においても、同じ楽曲でも、曲想変化が違う演奏を鑑賞する機会や歌唱などを通じて、演奏経験を増やしていくことが大切である。様々な表現方法を学習することによって、楽曲が一味も二味も変容することを学ぶことは、今後、記譜されていることの意味合いを理解させていく手だてにもつながっていくであろう。

(2) 学習の過程を自覚させる

成果は、自分の学習の過程を子ども自身がはっきりと自覚できたことである。同じ課題に取り組み、友達の演奏や演奏についてのアドバイスを聞いたり、演奏の様子を見たりすることで、子ども同士が見つめ直しをする観点が明確になり、はっきりとした技術目標が見えたことである。

課題としては、自分の演奏が他の楽器や歌唱などとアンサンブルしていく上で、様々な課題や問題点が出てくることである。一人一人が技術目標にしたがって演奏が完成したからといって、音楽的にみてより良い演奏になるとは限らない。学習の過程を自覚するということは、学習の中身が高次になるにしたがって、自分が学習過程において、どこまでできてさらに何が必要かを把握させる手だてを打たなくては自覚できないということである。

(3) 音や音楽を聴き比べる

成果は、聴き比べることが自分の表現や他の音楽表現の特徴を見つめ直すきっかけとなったことである。表現においては、自分たちの表現と他の共通点、相違点を見つけ、具体的な改善点や良さははっきりさせることができ、受けとめ合い見つめ直す手だてになったことである。さらにこんな表現にしたいという思いをもたせることができた。また、鑑賞においては、音楽の特徴をより明確にさせる手だてとなった。

課題は、聴き比べる観点をさらにはっきりさせるということである。「リズムの違い」「楽器の音色」「演奏形態」などの観点をはっきり子どもたちに意識させることが、受けとめ合い見つめ直す有効な手だてとなる。また、日頃の音楽学習の中で、音や音楽を聴き取る力や、音楽の良さや面白さ、美しさを感じ取る力をつけていくことも課題と言える。

(4) テキストを活用する

成果は、受けとめ合い見つめ直しの媒体としてテキストを活用し可視化することが有効だったことである。可視化することで、相手の意図を受けとめ、共有することができ、それが自分たちの表現の見つめ直しから、さらに良い表現への意欲につながっていった。また、録音して自分たちの演奏を再生し確かめることは、表現を向上させるための大切な手だてとなった。

課題は音符や休符や記号の理解、音楽を形づくっている要素に関わる語彙力や聴き取る力を発達段階に応じてつけていかなくてはならないことである。